

# 司訳院蒙学書の朝鮮語

松 岡 雄 太\*

[略号]

『捷蒙』:『捷解蒙語』

『蒙老』:『蒙語老乞大』

『蒙類』:『蒙語類解』

『翻老』:『翻訳老乞大』

『老諺』:『老乞大諺解』

『平老』:『平安官宮本老乞大諺解』

『老新』:『老乞大新釋諺解』

『重老』:『重刊老乞大諺解』

『清老』:『清語老乞大新釋』

## 1. 研究目的

朝鮮時代の司訳院は、近隣諸国に対する言語教育及び通事養成機関であるが、司訳院では、漢学（漢語）、蒙学（モンゴル語）、清学（満洲語）、倭学（日本語）の「四学」が設置され、四学ではそれぞれ教材である「訳学書」が編纂された。蒙学の教材である「蒙学書」は、18世紀に編纂された『捷解蒙語』、『蒙語老乞大』、『蒙語類解』の三種類が現存する。訳学書は、当該言語と朝鮮語の対訳形式からなるため、当該言語と朝鮮語の対照研究が可能である。すなわち、蒙学書は、モンゴル語と朝鮮語の対照研究を可能にする。元来、朝鮮語史で使用しうる文献の多くは、漢語からの翻訳であるから、漢語との対照研究も可能であるが、漢語と違って、モンゴル語は、朝鮮語と同様に、格助詞や動詞の活

---

\* 九州大学大学院人文科学研究院専門研究員，福岡大学人文学部非常勤講師

用語尾を有する。それゆえ、蒙学書を使用したモンゴル語と朝鮮語の対照研究は、特に、文法研究において意義があると考えられる。

蒙学書のうち、『蒙語類解』は語彙集であるため、文法研究においては、読本類の『捷解蒙語』と『蒙語老乞大』が研究対象となる。従来、蒙学書の朝鮮語の文法に言及した研究には、菅野（1963, 2000）による『捷解蒙語』の研究と、崔起鎬（1994）による『蒙語老乞大』の研究があるが、管見の限り、それ以外に見られない。しかし、前者は索引作業に重点が置かれている感があり、後者はモンゴル語と朝鮮語の部分的な対応関係を指摘するだけで包括的なものではない。つまり、蒙学書を使用した近代朝鮮語の文法記述は、今後の課題といえる。ただし、蒙学書を使用する際には、蒙学書の朝鮮語の性格上、研究に先立っていくつかの注意を要する点がある。本稿では、その一例として、蒙学書に不自然な朝鮮語が見られることを指摘し、それらがモンゴル語からの直訳によることを主張する。しかし、一方でそのような不自然な朝鮮語の例が、朝鮮語文法の通時的変遷を明らかにする上で、重要な証拠になることを主張する。

## 2. 蒙学書の朝鮮語の留意点

菅野（1963:66）は、『捷解蒙語』の朝鮮語について「モンゴル語の名詞的実詞の曲用語尾および不変化詞に対してなされた朝鮮語訳はだいたい機械的な直訳であるが、動詞の活用語尾に関しては、双方の言語の動詞の体系の大きな相違から、モンゴル語と対訳朝鮮語との間にはそれほど厳密な対応関係はない」と述べる。この指摘は概ね正しい。すなわち、蒙学書の朝鮮語は、モンゴル語からの直訳という性格をもつといえる。本章では、以下、蒙学書の朝鮮語には、モンゴル語から直訳した結果、不自然な例が見られることを指摘する。特に、『蒙語老乞大』は、他の老乞大と比較することによって、その特殊性が明らかとなる。

## 2.1. 与位格

李珣鎬（2004:261-263）は、近代朝鮮語における与位格の機能として、(1)の五つを記述する。しかし、蒙学書の朝鮮語には、(1)の記述では説明できない例が見られる。

### (1) 与位格助詞の名詞句の意味

- a. 空間(場所)
- b. 時間
- c. 原因
- d. 比較
- e. 指向点(到着点)

### 2.2.1. 行<sup>ㅎ</sup>다, 오다

(2)は、「行<sup>ㅎ</sup>다」が与位格を支配している例である。「길히」は「道に行く」のではなく、「道を行く」と解釈されうるもので、「経路」を表していると考えられる。

- (2) 네 본<sup>ㅅ</sup>디 서울 가서 소<sup>ㅅ</sup>음과 깃<sup>ㅅ</sup>을 사 王京 가 풀<sup>ㅅ</sup>면 길<sup>ㅎ</sup>히 몇 날 行<sup>ㅎ</sup>흘너  
 ㅅ. (お前さんは元々京 (=北京)に行つて綿と絹を買い、王京 (=ソウル)  
 に行き売つたら、道中、何日で行くかい) [蒙老:一:20a2-20a5]<sup>1</sup>

以下の(3)は、(2)に該当する『蒙老』以外の老乞大の箇所である。“前後에”及び“往來”のように、異なる表現になっている。このことは、(2)が『蒙老』のみ見られる特殊な表現であることを支持する。

<sup>1</sup> 用例の引用において、例えば、[捷蒙:一:8b3-9a2]は、『捷解蒙語』巻1, 8丁裏3行から9丁表2行を意味している。

- (3) a. 네 본딤 서울 가 천량 프라 쏘 소음 깃 사 王京의 가 프노라 흐야 前後에 언메나 오래 머므는다. [翻老:上:14b9-15a3]
- b. 네 본딤 서울 가 貨物을 프라 쏘 소음과 깃을 사 王京에 가 프노라 흐면 前後에 언메나 오래 머물러노. [老諺:上:13b1-13b5]
- c. 네 본딤 서울 가 貨物을 프라 쏘 소음과 깃을 사 王京의 가 프노라 흐면 前後에 언메나 오래 머물러노. [平老:上:13b1-13b5]
- d. 네 본딤 서울 가 貨物을 풀고 즉시 綾과 깃을 사 王京에 가 프노라 흐면 前後에 몇 날을 머물러노. [老新:上:18b]<sup>2</sup>
- e. 네 본딤 서울 가 貨物을 풀고 곳 綾과 깃을 사 王京에 가 프노라 흐면 前後에 몇 날을 머물러노. [重老:上:13a10-13b3]
- f. 네 본딤 皇城에 가 貨物을 풀고 쏘 소음과 깃을 사서 王京에 흥정 흐라 가면 往來 몇 들 든니는다. [清老:一:20b4-21a2]

以下の(4)は,(2)に対応するモンゴル語であるが,“jam du”のように,与位格になっている.ゆえに,(2)は(4)を直訳したものと考えられる.

- (4) ci ijayur ging qotun du eciged, kübüng giuwansa yi qudalduji abuyad wang ging du ecijü qudaldququla jam du kedün edür yabun-a.

次に,(5)は,“오다”が与位格を支配している例である.この“길히”も「経路」を表している.現代語は(6)のように非文になる.

- (5) 내 길히 올 썩 漢 말을 아지 못흐모로, 길히 먹을 것과 물 집과 콩과 햅쳐를 이 兄이 다 受苦흐드니라. (私は道を来る時,漢語が分からないので,道中食べるものと馬の草と豆と宿をこちらの兄が全部苦労したの

<sup>2</sup> 『老新』の例は,李賢熙編《노걸대언해류 비교》(私家版)より引用.

だ) [蒙老:五:8a4-8a7]

- (6) 나는 이 길 {\*에/\*을} 올 때 사고당했다. (私はこの道に来る時に事故に遭った)

以下の(7)は, (5)に該当する『蒙老』以外の老乞大の箇所である. “길 조차 올”のように間に“조차”を入れるか, “오다”を削除しており, 異なる表現になっている. このことは, (5)が『蒙老』にのみ見られる特殊な表現であることを支持する.

- (7) a. 내 길 조차 올 시저리 마장 만히 더의 거리치물 나부라. 나는 漢兒의 마를 모르모로 길헤 머글 거시며 물들히 草料이며 하츄들히 전혀 이 형님이 슈고히더니라. [翻老:下:6a6-6b2]
- b. 내 길흘 조차 올 적의 마장 만히 더의 구제흠을 어드와. 내 한 말을 아디 못히니 길헤 먹을 써시며 물들히 草料와 다뭇 하쳐를 전혀 이 큰 형이 슈고히더니라. [老諺:下:5b6-6a1]
- c. 내 길흘 조차 올 적의 마장 만히 더의 구제흠을 어드와. 내 한 말을 아디 못히니 길헤 먹을 써시며 물들의 草料와 다뭇 하쳐를 전혀 이 큰 형이 슈고히더니라. [平老:下:5b5-6a1]
- d.『老新』 該当箇所なし
- e. 내 길히 만히 저의 돌봄을 힘 님어시니. 우리스 中國 말을 아지 못히매 길히 물 집과 콩과 다뭇 下處를 전혀 이 큰 형이 나를 마르차 츠리물 미덧노라. [重老:下:6a5-6a10]
- f.『清老』 該当箇所なし

以下の(8)は, (5)に該当するモンゴル語であるが, (4)と同様に, 与位格になっ

ている。ゆえに、(5)は(8)を直訳したものと考えられる。

- (8) bi jam du irekü dü kitad üge yi cidaqügei tula, jam du idekü anu mori  
yin ebesü burcay bausan ger -i ene abayai cöm jobaqu bile.

### 2.2.2. 分別하다

(9)は、“分別하다”が与位格を支配している例である。この与位格“일에”は「対象」を表していると考えられる。現代語は(10)のように非文になる。

- (9) 죽은 후에 온갖 일에 分別치 못하여 能히 좃디 못하느니. (死んだ後は、  
あらゆることを区別できず，従うことができないのだ)[蒙老:七:9a2-  
9a4]
- (10) 너는 선악{을/\*에} 分別하지 못한 것 같다. (お前は善悪を区別できない  
みたいだ)

以下の(11)は、(9)に該当する『蒙老』以外の老乞大の箇所である。動詞が“글히다”や“헤다”のように、異なる表現になっている。このことは(9)が『蒙老』にのみ見られる特殊な表現であることを支持する。

- (11) a. 주근 후에는 아모것도 글히디 못하야 다 쥬변 몬홀 거시니.  
[翻老:下:41b8-42a1]
- b. 죽은 후에는 아므것도 글히디 못하야 다 쥬당티 못하야,  
[老諺:下:37b8-37b10]
- c. 죽은 후에는 아모것도 글히디 못하야 다 쥬당티 못하야,  
[平老:下:37b8-37b10]
- d. 『老新』該当箇所なし

- e. 죽은 후에는 아프란 거슬 헤지 아니코 다 主張치 못ᄃᆞ여,  
[重老:下:40a9-40a10]
- f. 『清老』 該当箇所意識

以下の(12)は, (9)に対応するモンゴル語であるが, “kereg tü” のように, 与位格になっている。ゆえに, (9)は(12)を直訳したものと考えられる。

- (12) üküsen qoyin-a eldeb jüil -ün kereg tü ilyan cidaqugei dayaju cidaqugei.

なお, (13)は, (9)と似た文脈で, “分別ᄃᆞ다” が対格を支配している例である。このことは(9)の与位格助詞が「対象」を表していることを支持するといえる<sup>3</sup>。

- (13) 兄아 네 말이 올타. 우리 저기 사람은, ᄃᆞ며 사오나오물 分別치 못ᄃᆞ고 다만 賤ᄃᆞ 거슬 곱희여 사니. (兄よ, あなたの言う通りだ. 我々あちちの人 (=朝鮮国民)は (物の)良し悪しを區別できずに, ただ安いものを選んで買うのだ) [蒙老:八:15b6-16a2]

### 2.2.3. 보다

(14)は, “보다” が与位格を支配している例である。この与位格“主人의게”も「対象」を表していると考えられる。現代語は(15)のように非文になる。

<sup>3</sup> なお, (13)に対応するモンゴル語は, 以下の (a) に示すように, 対格になっている。  
(a) abayai cinu üge jüb man-u tendeki kümün, sayin mau yi ilyaqugei yanca elbeg yaum-a yi songyoju abun-a.

- (14) 主人의게 보고 가자. 主人 兄아 우리 가노라. (主人に会ってから行こ  
う. ご主人よ, 私たちは行きます) [蒙老:三:1a7-1b2]
- (15) 나는 대학에서 친구 {를/\*에게} 보았다. (私は大学で友達に会った)

以下の(16)は, (14)に該当する他の老乞大の箇所である. 『清老』は『蒙老』と同様に与位格を支配しているが<sup>4</sup>, 『清老』以外は, 動詞が“하딕(직)ㅎ다”のように, 異なる表現になっている.

- (16) a. 쥬신손딕 하딕ㅎ라 가져. 쥬신 형님 허믈 마르쇼셔. 우리 가노이다. [翻老:上:38b2-38b4]
- b. 主人의게 하딕ㅎ고 가자. 主人 형아 허믈 말라. 우리 가노라.  
[老諺:上:34b7-34b9]
- c. 主人의게 하직ㅎ고 가자. 主人 兄아 허믈 말라. 우리 가노라.  
[平老:上:34b7-34b9]
- d. 主人의게 하직ㅎ고 가자. 主人아 허믈 말라. 우리 가노라.  
[老新:上: 48a]
- e. 主人의게 하직ㅎ고 가자. 主人아 허믈 말라. 우리 가노라.  
[重老:上:34b8-34b10]
- f. 主人의게 보고 가자. 主人 형아 해롭게 ㅎ다 ㅎ여 怨치 말라. 우리 가노라. [清老:三:4a4-4a6]

以下の(17)は, (14)に該当するモンゴル語であるが, “ger -ün ejen dü”のように, 与位格になっている. ゆえに, (14)は(17)を直訳したものと考えられる.

---

<sup>4</sup> 『清老』は『蒙老』と同様に, “보다”が与位格を取っている. しかし, これは満洲語からの直訳であると考えられる. 以下の(b)は, (16f)に対応する満洲語であるが, “boihoji de”の“de”は, 満洲語の与位格である.

(b) boihoji de acafi geneki. boihoji age ume gasihyabuha seme gasara. be genembi.



(17) ger -ün ejen dü jolyiji eciy-e ger -ün ejen abayai bida ecin-e.

#### 2.2.4. 즐기다

(18)は, “즐기다” が与位格を支配している例である. 上述の(9), (14)と同様に, 与位格 “술에” は「対象」を表していると考えられる. 現代語の “즐기다” は, 以下の(19)のように, 対格のみを取り, 与位格は非文になる.

(18) 큰 兄의 니르논 거시 올타. 前에 밧기 든니기 닉으면 正히 손들을 사랑호고제 술에 즐기면 醉호 사롬을 앓긴다 호엿느니라. (大兄の言う通りだ. 昔から, 「外を通い慣れていれば, 確実に客人らを愛し, 自分が 酒を楽しめば, 酔った人を慈しむ」と言っている) [蒙老:三:5a7-5b5]

(19) 나는 그 게임 {을/\*에} 즐겼다. (私はそのゲームを楽しんだ)

以下の(20)は, (18)に該当する『蒙老』以外の老乞大の箇所である. 動詞が “즐기다” ではなく, “탐호다” 或いは “호하호다” のように, 異なる表現になっている. このことは(18)が『蒙老』にのみ見られる特殊な表現であることを支持する.

(20) a. 큰 형님 니르샤미 올호시이다. 일즉 외방의 나 든니기 니그면 일편 도이 나그내를 에엿비 너기고 나옴 술을 탐호면 취호 사롬을 앓기느니라. [翻老:上:41b7-42a1]

b. 큰 형의 니롬이 올타. 일즉 외방의 나 든니기 니그면 일편되이 나그내를 에엿비 너기고 나옴 술을 탐호면 취호 사롬을 앓기느니라. [老諺:上:37b6-37b9]

c. 큰 형의 니롬이 올타. 일즉 외방의 나 든니기 닉으면 일편되이 나그내를 에엿비 너기고 나옴 술을 호하면 취호 사롬을 앓기느니라.

[平老:上:37b6-37b9]

- d. 큰 형의 니르미 올타. 속말에 닐러시되 밧기 나가기 닉으면 독별 이 나그너를 에엿비 너기고 이녁이 술을 貪흐면 醉흐 사름을 앓긴다 흐니. [老新:上: 52b]
- e. 큰 형의 니르미 올타. 속말에 니르되 밧기 나가기 닉으면 편벽히 나그너를 에엿비 너기고 이녁이 술을 貪흐면 醉흐 사름을 앓긴다 흐니라. [重老:上:38a8-38b1]
- f. 형아 네 니르논 말이 올타. 밧기 돈너 닉은 이면 待客흐는 거시 重흐고, 술 초하흐면 취흐 사름을 앓기느니라. [清老:三:8b5-9a3]

以下の(21)は, (18)に該当するモンゴル語であるが, “darasu du”のように, 与位格になっている. ゆえに, (18)は(21)を直訳したものと考えられる.

(21) *yeke abayai kelekü ni jüb urda yadan-a yabuju bolbasurqula coqom geyicin neri qayiralamui. öberen darasu du duratai bolqula suytosan kümün -i qayiralamui kemejüki.*

なお, (22)は, “즐기다” が対格を支配した例である<sup>5</sup>. (22)は(18)の与位格助詞が「対象」を表していることを支持するといえる.

(22) 다 가면[면] 제 사름 만흐를 보고 재오기를 즐겨 아니흐리라. (全員で  
行けば, 彼は人が多いのを見て泊めるのを快く思わないだろう)  
[蒙老:三:12a6-12b1]

---

<sup>5</sup> なお, 以下の (c) は, (22) に対応するモンゴル語であるが, “kebteülküi yi” のように, 対格になっている. ゆえに (22) は (c) を直訳したものであると考えられる.  
(c) *cöm eciküle tere kümün olon -i üjeced kebteülküi yi bayarlaqugei bui j-re.*

以上, (2), (5), (9), (14), (18)は, 李珣鎬(2004)の記述によって説明できない  
与位格の例である. なお, 李珣鎬(2004: 245-250)は, 与位格と対格の置き換  
えが可能な場合として, 授与動詞との結合を挙げているが, 上記の例はそれ  
にも該当しない. 『蒙老』(或いは『清老』)に特殊な例である.

## 2.2. 対格

以下の(23)と(24)は, 対格が従属節の意味上の主語になっている例である<sup>6</sup>.

- (23) 어제 네 어딴 갔던다. 내 사람을 부려서 너를 請<sup>ㅎ</sup>여 드리라 가니. 네  
집 사람이 너를 집의 업고 다른 디 갔다 ㅎ매. (昨日お前さんはどこに  
行っていたんだ. 俺は人を遣わしてお前さんを呼びに行ったんだ. お前  
さんの家の者が, お前さんが家におらず他のところに行ったというから)  
[捷蒙:三:16a3-16b2]
- (24) 다른 ㅎ 일<sup>2</sup>에 가고져 ㅎ되 또 너를 을<sup>2</sup>외 ㅎ여 마장 ㅂ<sup>2</sup>을 허비<sup>2</sup>히여시  
니. 兄아 네 이 그르도다. (別のある仕事で出かけようとしたが, またあ  
なたが来るかと思って, とても心労したんだ. 兄よ, これはあなたの失敗  
です) [捷蒙:三:17a2-17b1]

(23), (24)に該当するモンゴル語はそれぞれ以下の(25), (26)である. モンゴ  
ル語において, 従属節の意味上の主語は, 対格でも表すことができるが, (23),  
(24)の朝鮮語は, この直訳であると考えられる.

- (25) öcügetür ci qamiy-a oduysan bile. bi kümün -i jaruju cimayi jalan  
abur-a oduyulbasu cinu ger -ün kümün cimayi gerte ügei busutesi

<sup>6</sup> (23), (24)の対格は, 「お前のことを〜という」のように, “ㅎ다”によって支配され  
ると解釈することも可能である.

odba kemebei.

- (26) busud nigen kereg tür odsuyai kemebesü basa cimayi ireküjin kemen, yayudai sanayan -i oroba. abayai cinu ene buruyu boljuqui.

### 2.3. 主格

(27)は、主格の例であるが、多少不自然に見える。“닉다”は、本来、主格助詞を取る名詞が主語となるのが一般的と考えられるが、(27)の“길히”は“닉다”の主語ではない。この主格助詞は「対象」を表している。これに対して、(28)の“고기”は、“닉다”の意味上の主語であると考えられるが、自然な例といえる。

- (27) 나는 朝鮮 사람이라. 漢 짜히 길히 닉지 못히니. 네 반드시 날로 더브러 번 지어 가라. (私は朝鮮人だ. 漢の地で道に不慣れだ. お前さん, 絶対に私と一緒に連れ立って行ってくれ) [蒙老:一:10a3-10a6]
- (28) 이 고기 닉어시니 네 맛 보라. 빚나. 슴겨오냐. (この肉はできあがった. お前さん, 味見してくれ. 辛いか, 薄いか) [蒙老:二:3b5-3b6]

以下の(29)は、(27)に該当する『蒙老』以外の老乞大の箇所であるが、動詞“든니다”が入れている。(27)が『蒙老』にのみ見られる特殊な例であることを示唆する。

- (29) a. 나는 高麗人 사람이라. 한 짜해 니기 든니다 못히야 잇노니. 네 모로매 나를 더러 번 지서 가고려. [翻老:上:7b7-8a1]
- b. 나는 高麗人 사람이라. 漢人 짜히 니기 든니다 못히엿노니. 네 모로미 나를 더러 벗 지어 가고려. [老諺:上:7a3-7a6]
- c. 나는 高麗人 사람이라. 漢人 짜히 닉이 든니다 못히엿노니. 네 모

로미 나를 드려 벗 지어 가고려. [平老:上:7a3-7a6]

d. 나는 이 朝鮮人 사람이라. 中國人 싸히 본디 든니기 닉지 못흐니.

네 모로미 나를 드려 혼가지로 벗 지어 가자. [老新:上:9a]

e. 나는 이 朝鮮人 사람이라. 中國人 싸히 본디 든니기 닉지 못흐니.

네 모로미 나를 드려 혼가지로 벗 지어 가자.

[重老:上:7a7-7a10]

f. 나는 朝鮮 사람이라. 漢 싸히 든니기 닉지 못흐니. 내 너과 벗 지어 감이 엇더호노. [清老:一:10a1-10a3]

以下の(30)は,(27)に該当するモンゴル語であるが,“jam bolbasursan”のように,ゼロ語尾になっている.モンゴル語のゼロ語尾は主格を表すのが一般的なので,(27)は(30)を直訳したものと考えられる.

(30) bi coohiyān kümün. kitad -un yajar tu jam bolbasursan ügei ci erke ügei nada luy-a nöbür kijü eci.

## 2.4. 도

(31)は,特殊助詞“도”の例であるが,“도”の挿入によって,統語構造が不自然になっているように見える.以下の(31)は,「AはXだ. BはXではない」の構文であるが,「AはXだ. BもXではない」になっている.“도”は,通常「AはXだ. BもXだ」の構文で用いられると考えられる.

(31) 네 물 깃기 닉다. 나도 물 깃기 닉지 못흐와. 네 몬져 길라 가라. 우리 둘히 물을 잇그려 가마. (お前さんは水波みに慣れていて.私は水波みに不慣れだ.お前さんが先に波みに行ってくれ.私たち二人は馬を引いて行こう)[蒙老:二:21a7-21b4]

以下の(32)は, (31)に該当する『蒙老』以外の老乞大の箇所であるが, どれも“도”はない。(31)が特殊な例であることを支持するものである.

- (32) a. 네 물기리 니근 듯ㅎ고나. 내 물기리 닉디 못호라. 네 몬져 물 기  
르라 가라. 우리 둘히 물 잇거 가마. [翻老:上:34b6-34b9]
- b. 네 물깃기 니근 듯ㅎ피야. 내 물깃기 닉디 못호랴. 네 몬져 물 길  
라 가라. 우리 둘히 물 잇그러 가마. [老諺:上:31a9-31b2]
- c. 네 물깃기 닉은 듯ㅎ피야. 내 물깃기 닉디 못호랴. 네 몬져 물 길  
라 가라. 우리 둘히 물 잇그러 가마. [平老:上:31a9-31b2]
- d. 네 물깃기 닉이 아는다. 내 물기리 아직 못ㅎ노라. 네 물 길라 가  
라. 우리 둘히 물 잇그러 가마. [老新:上:43b]
- e. 네 물깃기 닉이 아는다. 내 물깃기 아직 못ㅎ니. 네 물 길라 가  
라. 우리 둘히 물 잇그러 가마. [重老:上:31a9-31b2]
- f. 『清老』該當箇所なし

以下の(33)は, (31)に該当するモンゴル語であるが, “mün” になっている.  
“mün” は『蒙老』の朝鮮語では, 専ら“도, ㅅ(ㅎ)”などに機械的に翻訳  
されている.

- (33) cinu usu udququ anu bolbasuraba. bi mün udquju bolbasuraysan ügei.  
ci urida udquq-a eci bida qoyayula mori yi uduridcu ecinem.

## 2.5. 써

(34)は“써”が与位格助詞のあとで用いられている例である. このような  
“써”は, (35)のように, 現代語では非文になる.

- (34) 우리 이 朝鮮 말은 다만 朝鮮 사히문 쓰고, 義州 지나 漢 사히 오면 다 漢 말이라. (我々のこの朝鮮語はただ朝鮮の地でのみ使い, 義州を過ぎ, 漢の地に來たら全て漢語だ) [蒙老:一:7a3-7a5]
- (35) 일본어는 일본에서 {만/\*뽀} 쓰인다. (日本語は日本でのみ使われる)

以下の(36)は, (34)に該当する他の老乞大の箇所であるが, 全て現代語と同様の“만”になっている. このことは, (34)が『蒙老』にのみ見られる特殊な例であることを支持する.

- (36) a. 우리 이 高麗人 말소문 다만 高麗人 사해만 쓰는 거시오 義州 디나 中朝 사해 오면 다 漢語 헝느니. [翻老:上:5b2-5b5]
- b. 우리 이 高麗人 말은 다만 高麗人 사히만 쓰고 義州 디나 漢人 사히 오면 다 한 말이라. [老諺:上:5a2-5a5]
- c. 우리 이 高麗人 말은 다만 高麗人 사히만 쓰고 義州 디나 漢人 사히 오면 다 한 말이라. [平老:上:5a2-5a6]
- d. 우리 이 朝鮮人 말은 다만 朝鮮人 사히만 쓰고 義州 지나 中國人 사히 가면 다 이 한 말이라. [老新:上:6ab]
- e. 우리 이 朝鮮人 말은 다만 朝鮮人 사히만 쓰고 義州 지나 中國人 사히 가면 다 이 한 말이라. [重老:上:5a2-5a6]
- f. 우리 이 朝鮮 말은 다만 朝鮮 사히만 쓰고 義州를 지나 漢 사히 오면 전혀 오로 漢 말임에, [清老:一:7a1-7a4]

以下の(37)は, (34)に対応するモンゴル語であるが, “tedüi” になっている. “tedüi” は, 『蒙老』の朝鮮語では, 専ら“뽀, 만”と機械的に翻訳されている.

- (37) *bidan -u ene cookiyan üge yayca cookiyan yajar -un tedüi kereglemüi. ayijui önggerejü kitad -un yajar tu irebesü cöm kitad üge.*

## 2.6. 引用構文

(38)は引用構文の例である。(38)の“*ᄃ야 生覺ᄃ고*”は、“*ᄃ야*”が文字通り「言って、思っ」の意味であるとすれば、“*ᄃ야*”か“*生覺ᄃ고*”のどちらか一つが余剰的である。

- (38) *ᄃ 盜賊이 거기 밋츠 와 보고 제 生覺에 허리에 썬 纏帶엿 거시 도ᄃ  
財物인가 ᄃ야 生覺ᄃ고, (一人の盜賊がそこにやっけて、見て、彼の  
考えに、腰に帯びた帯のものがよい財物か思っ) [蒙老:二:11b5-  
12a1]*

以下の(39)は、(38)に該当する『蒙老』以外の老乞大の箇所である。『清老』を除いて<sup>7</sup>、“*ᄃ야(고)*”のみになっている。このことは(38)が特殊な例であることを支持する。

- (39) a. *ᄃ 도즈글 맛나 게 와 보고 닐오ᄃ 허리엿 전대에 처니라 ᄃ고,*  
[翻老:上:27b8-28a1]
- b. *ᄃ 도적을 만나 게 와 보고 그저 니로ᄃ 허리 전대엿 거시 이 錢物 이  
라 ᄃ여, [老諺:上:25a5-25a6]*
- c. *ᄃ 도적을 만나 게 와 보고 그저 닐오ᄃ 허리 전대엿 거시 이 錢物이*

---

<sup>7</sup> 『清老』の朝鮮語も、“*ᄃ여 싱각ᄃ고*”のように、『蒙老』と同じ形をとっている。(39f)に該当する満洲語の“*seme*”も、モンゴル語の“*gejü*”と同様、もともとは“*se-*(言う)+*-me*(…して)”に形態素分析されるが、これも“*seme*”全体が引用文を表す補文標識である。

(d) *emu hülha tubaci duleme genere de sabufi dara de unuhe jaka be ainci ulin seme gūnifi,*



- 라혀여, [平老:上:25a5-26a7]
- d. 혀 도적이 게 와 보믈 녀몹니 그저 니르되 허리에 썬 거시 이 錢物이라 혀여, [老新:上:34b-35b]
- e. 혀 도적이 게 와 보믈 녀몹니 그저 니르되 허리에 썬 거시 이 錢物이라 혀여, [重老:上:25a4-25a6]
- f. 혀 盜賊이 그리로 지나갈 제 보고, 허리에 썬 거슬 응당 貨物이라 혀여 싱각혀고, [清老:二:15a1-15a4]

以下の(40)は, (38)に対応するモンゴル語であるが, “gejü” になっている.

“gejü” は引用文を表す補文標識であるが, 歴史的には “ge-(言う)+jü(…して)” に形態素分析される。(38)の “혀야” は, この “gejü” をそのまま直訳したものと考えられる.

- (40) nige qulayayici tende kürcü irejü üjeged tegünü sanayan du niruyun du büseleksen sumal -un yayum-a sayin ed gejü sanayad

以下の(41)も, (38)と同様に, “혀야” が余剰的な例である.

- (41) 집이 다 平安혀면 黄金을 貴타 혀야 닐으지 말라. 平安혀면 갑시 만혀니라. (家がみな平安ならば黄金を大切に言ってはいけない. 平安ならば価値が高いのだ) [蒙老:五:5b3-5b6]

以下の(42)は, (41)に該当する他の老乞大の箇所であるが, 全て “혀야” がない表現になっている.

- (42) a. 그리 이대 이시면 황금이 귀하다 니르디 말라. 편안호미샤 빔소미  
하니라. [翻老:下:4a6-4a8]
- b. 그리 도히 이시면 黃金이 귀하다 니르디 말라. 편안흙미아 빗쓰미  
하니라. [老諺:下:3b9-4a1]
- c. 그리 도히 이시면 黃金이 귀하다 니르디 말라. 편안흙미아 빗쓰미  
하니라. [平老:下:3b9-4a1]
- d. 『老新』該当箇所なし
- e. 이리 다 편안흐량이면 黃金을 貴타 니르지 말라. 安樂호미 갑빔미  
하니라. [重老:下:4a6-4b8]
- f. 진실로 집이 다 平安흐면 黃金을 므슴 貴타 홀 것 이시리오.  
[清老:五:7b4-7b5]

以下の(43)は, (41)に対応するモンゴル語であるが, (40)と同様に, “gejü” になっている.

- (43) ger bultu amur geküle sir-a alta yi erkim gejü buu ögüle. amur  
bolqula ün-e ileü bišwü.

以下の(44)も, (38), (41)と同様に, “흐야” が余剰的な例である.

- (44) 흥혀 흥 말을 무려든 능히 니르지 못흐면 다른 사람이 우리를 므슴 사  
릅이라 흐야 보리오. (もし (漢人が)一言尋ねて, 答えられなければ, 他  
の人は私たちを何者だと思うだろうか) [蒙老:一:7a7-7b3]

以下の(45)は, (44)に該当する他の老乞大の箇所であるが, 『清老』を除いて<sup>8</sup>, “사마” 或いは “으로” のように, 異なる表現になっている。

- (45) a. 아되나 혼 마를 무러든 쏘 디답디 못흐면 다른 사르미 우리를 다가  
므슴 사르물 사마 보리오. [翻老:上:5b6-5b9]
- b. 아되나 혼 말을 무러든 쏘 디답디 못흐면 다른 사름이 우리를 다가  
므슴 사름을 사마 보리오. [老諺:上:5a7-5a9]
- c. 아되나 혼 말을 무러든 쏘 디답디 못흐면 다른 사름이 우리를 다가  
므슴 사름을 사마 보리오. [平老:上:5a7-5a9]
- d. 만일 사름이 혼 구 말을 무러든 쏘 니르지 못흐면 다른 사름이 우리를  
다가 므슴 사름으로 보리오. [老新:上:6ab]
- e. 만일 사름이 혼 구 말을 무러리 이셔든 쏘 니르지 못흐면 다른 사름이  
우리를 다가 엇더흐 사름으로 보리오. [重老:上:5a6-5a9]
- f. 아되나 만일 혼 말 무러든 눈 멀거니 보고 능히 디답지 못흐면 다른  
사름이 우리를 므슴 사름이라 흐여 보리오. [清老:一:7a5-7b2]

以下の(46)は, (44)に対応するモンゴル語であるが, やはり(40), (43)と同様に, “gejü” になっている。

- (46) kerbe nige üge asauqu bolqula kelejü cidaqu ügei bolbasu busud  
kümün man -i yamar kümün gejü üjemüi.

<sup>8</sup> 『清老』は, 『蒙老』と同様に “흐여” が挿入されているが, これも注7)と同様に, 満洲語からの直訳と考えられる。(45f)に対応する満洲語は以下の(e)であるが, “seme” になっている。

(e) we ya aika emu gisun fonjime ohode, yasa gadahün -i šame jabume muterakü oci, gūwa niyalma membe ai niyalma seme tuwambi.

以上、2章では、『蒙老』と『捷蒙』に見られる不自然な朝鮮語の例を指摘したが、これらは注意を要するものである。これら不自然な朝鮮語は、全て本文のモンゴル語を直訳した結果生じたものであると考えられるが<sup>9</sup>、今後、蒙学書の朝鮮語を研究対象にする際には、モンゴル語も同時に言及する必要があるといえる。

### 3. 蒙学書の朝鮮語の貢献する点

2章で見たように、モンゴル語からの直訳を特徴とする蒙学書の朝鮮語であるが、一方で、朝鮮語の通時的研究に対して、重要な証拠を提供する場合もある。3章では、以下、その一例として、朝鮮語の多重ヴォイス接辞について考察する。

#### 3.1. 多重ヴォイス接辞

朝鮮語のヴォイスの通時変化について、近代朝鮮語の時期、特に18世紀になって多重ヴォイス接辞<sup>10</sup>が多く現れることが指摘されている(유경중 1995)。李相億(1970:178-195)は、多重ヴォイス接辞が二重・三重の使役・受身を表すものではなく、単一のヴォイス接辞と同じ意味であることを指摘したが、そうだとすれば、これら多重ヴォイス接辞が現れる理由が問題となる。このことに対する先行研究の見解は、以下の(47)の通りである。

---

<sup>9</sup> 2章で指摘した不自然な朝鮮語に対して、当時の文法性の判断に揺れがあった可能性もありうるが、蒙学書は外国語教材であるから、外国語と母国語の違いを明らかにするために、文法的に不自然であったとしても、直訳が意図的に行われたものとする。

<sup>10</sup> 本稿が対象とするのは、いわゆる“-이 -/ -히 -/ -리 -/ -키 -”が二つ以上重複した形態論的な表現形式であり、“-게다”のような統語論的な表現形式については言及し

## (47) 先行研究の見解

- a. 口調上の機能: 李相億(1970:188-195)
- b. 音調の表示: 郭忠求(1980:25-26)
- c. 強調 (強化) 表現: 韓在永(1984:36-39), 유경중(1994), 유경중(1995:89-96, 148-160), 류성기(1998:95-98)
- d. 使役形と受身形の区別: 류성기(1984:53-56)
- e. 無意味なもの: 우인혜(1997:212-216)

## 3.2. 本稿の見解

本稿では, (47)の諸見解に対して, 多重ヴォイス接辞が使役や受身を意識した結果作られた可能性を主張する. まず, 以下の(48)~(50)は『捷蒙』に見られる受身の多重ヴォイス接辞の例である.

- (48) a. 사람이 私欲에 무리여서 글에 구올려 道理를 구히여 통코져 아니흐면 나중내 열리이논 거시 업고, (人が私欲に驅られて, 學問を怠け, 道理を求め通じようとしなければ, 終に開かれることはなく)  
[捷蒙:一:8b3-9a2]
- b. kümün küsel yuyaci dur qalqalaydaju bicig tür ergicegül -ün yosun jüi yi erin nebteresügei kemekü ügei bolbasu ecüstel-e nekegdekü anu ügei.
- (49) a. 사람의 善惡을 반드시 날이 오린 후에야 안다 흐라. 頃刻에도 알리이느니라. (人の善惡を必ず日が経った後に知るといふのか. 直ぐにでも知らされるのだ) [捷蒙:四:15a2-15a6]
- b. kümün -ü sayin mayu yi erke ügei edür udayısan qoyin-a sayi tanımıi geneü. genedte jayur-a dur mün taniydamui bolai.
- (50) a. 그러흐나 우리 兄弟의 몸이 비록 두 곳에 갈리여 이시나 뜻과 맞음

은 아조 갈리인 곳이 업스니라. (そういえども, 私たち兄弟の身がたとえ二つの場所に離れていても, 気持ちと心は全く離れた所にいないのだ) [捷蒙:四:16b4-17a3]

b. teyin kemebecü bida aq-a degüü yin bey-e kedü qoyar yajar tur tasiyalaydan abacu sanay-a sedkil oyto tasiyalaydaysan yajar ügei.

(48)～(50)の(a)の朝鮮語に対応する本文のモンゴル語(b)を見てみると, 全て受身形の“-yda-”になっている。つまり, 上記の朝鮮語の多重ヴォイス接辞は, 全てモンゴル語の受身形を意識的に翻訳したものであることが分かる。

次に, (51)は『蒙老』に見られる使役を表わす多重ヴォイス接辞の例である。

(51) 다 가면[면] 제 사람 만흐믄 보고 재오기를 즐겨 아니흐리라. (全員で行けば, 彼は人が多いのを見て, 泊めるのを快く思わないだろう)  
[蒙老:三:12a6-12b1]

以下の(52)は, (51)に該当する他の老乞大の箇所である。

(52) a. 다 가면 더 人家 | 사름이 만흐 주를 보면 즐겨 자게 아니흐리니.  
[翻老:上:46b6-46b8]

b. 다 가면 더 人家 | 사름이 만흐 줄을 보면 즐겨 재디 아니흐리니.  
[老諺:上:42a5-42a7]

c. 다 가면 더 人家 | 사름이 만흐 줄을 보면 즐겨 재디 아니흐리니.  
[平老:上:42a5-42a7]

d. 다 가지 못흐리라. 저 人家 | 사름 만흐믄 보면 즐겨 재오지 아닐가 흐노라. [老新:上:59a]

- e. 만일 다 가면 저 人家 | 사람 만흐믄 보면 즐겨 재오지 아닐까 저  
프니. [重老:上:42b8-43b10]
- f. 만일 들썩 가면, 저 집 사람이 반드시 사람 여러히하 재오지 슬희여  
아니 할 거시니. [清老:三:15b2-15b4]

(52)において、『翻老』は“자계”，『老諺』と『平老』は“재다”であるが、これが『老新』以降で“재오다”になっている<sup>11</sup>。つまり、当初“자다”の使役形は“재다”であったが、その後さらに“재오다”という形が作られたことが分かる<sup>12</sup>。ここで“재오다”が現れるに至った理由が問題となるが、これも上記の受身形と同様、(51)に該当するモンゴル語は、使役形“-yul-”になっている。つまり、この朝鮮語はモンゴル語の使役形を反映したものと考えられるのである。

(53) cöm eciküle tere kümün olon -i üjeged kebteülküi yi bayarlaqugei bui  
j-e.

なお、(54)は『蒙老』に見られる“재다”の例である。

(54) 네 아지 못한다 요스이 흔 사람이 제 집의 여러 손틀 재엇더니. 그  
손이 간 後에 일이 나니 그 사람이 본딕 되게서 逃亡하야 왓는지라.  
(お前さんは知らないのか。最近ある者が自分の家に数人の客を泊めた  
のだ。その客が行った後に事件が起きて、その人が元々外から逃げてき

<sup>11</sup> 『老新』は『蒙老』の刊行より時代が下る。『蒙老』は1741年に刊行され、1766年と1790年に改修されたが、その原稿は1680年前後に既に出来上がっていたことが分かっている。

<sup>12</sup> 現代語の辞書の中には、“재다”を“재우다”の短縮形と記述するものがあるが、これはむしろ逆の現象であるといえる。

た者だったのだ) [蒙老:三:17a2-17a7]

(54)に該当する他の老乞大の箇所が(55)である。(55)で興味深いのは『清老』が“재우다”になっている点である。(54), (55)のように, ほぼ同年代に刊行された『蒙老』と『清老』において, 同じ文脈で“재다”と“재오(우)다”が現れる事実は, (51), (54)のように『蒙老』の使役形で“재다”と“재오(우)다”の両方が当てられているという事実と併せて, 18世紀当時, “재다”と“재오(우)다”が同じ意味を持って共存していたことを示唆する.

- (55) a. 네 모르느고나. 요제예 흘 사르미 지브서 다몬 아니 여러 나그내네  
를 햏야 쟈 전츠로 그 나그내 간 후에 일 나니 그 사름들히 쏘 다  
대 사르미 도망햏야 나가니어늘 [翻老:上:50a7-50b4]
- b. 네 모르느고나. 요스이 흘 사름의 집의셔 그저 여러 나그내로 햏  
여 재엇더니. 그 나그내 간 후에 일이 나니 그 사름들히 쏘 達達  
사름으로서 도망햏야 나온 이룻더라. [老諺:上:45a9-45b5]
- c. 네 모르느고나. 요스이 흘 사름의 집의셔 그저 여러 나그내로 햏  
여 재엇더니. 그 나그내 간 후에 일이 나니 그 사름들히 쏘 達達  
사름으로서 도망햏여 나온 이룻더라. [平老:上:45a9-45b5]
- d. 『老新』 該当箇所なし
- e. 네 아지 못햏다. 요스이 여귀 흘 人家 | 이셔 그저 여러 나그너로  
햏여 머무럿더니. 그 나그너 간 후에 일이 나니 뉘 그 사름이 이  
獐子스 사름으로 도망햏여 나오닌 줄을 아라시리오.  
[重老:上:46a3-46a10]
- f. 요스이 흘 사름의 집의 여러 손을 재웠더니. 그 손 中에 흘 逃亡  
흘 淸人이 잇던 연고로, [清老:三:20b5-21a2]



以上のような使役を表わす多重ヴォイス接辞について、유경중 (1995:154) は「使役接尾辞 ‘-이-’ は短母音形態素なので先行語根の母音と接尾辞間の母音縮約現象が起こると接尾辞が占めていた位置が空く．この空き間に新しい使役形態素を添加することで使役形態素を維持しようとする」と説明する．しかし、この主張には以下のような反例が見られる<sup>13</sup>．

유경중 (1995) の説明に従えば、例えば、“세다” の使役は元々“세다 (서이다)”であったが、“세다” が短母音化した結果、使役を表す接辞が音的に明示されなくなり、“세우다” が生まれたことになる．以下の(56)は、“세다” と “세우다” の分布、(57)は “트이다” と “티오다” の分布である．(56)と(57)からは、多重ヴォイス接辞の例が15世紀に既に確認される．つまり、短母音化は15世紀に起こっていたことになる．

## (56) “세다” と “세우다” の分布

15世紀	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	20世紀	意味
서이다	서이다	세다	세다			
세다	세다	세오다	세오다	세오다		
세오다	세오다	세우다	세우다	세우다	세우다	立
	세우다	세이다		서우다		
		세다	세오다			
		세오다	세우다	세우다		

## (57) “트이다” と “티오다” の分布

15世紀	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	20世紀	意味
	트이다	트이다			태우다	乘
티오다	티오다	티오다				

<sup>13</sup> (56)-(60) は김형배 (1997:278-293) より引用.

これに対して, (58)は“재다”と“재우다”の分布, (59), (60)は(58)と類似した振る舞いを見せる一例である.

(58) “재다”と“재우다”の分布

15世紀	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	20世紀	意味
재다	재다	자이다 재다 재오다	재다 재오다 재우다 재이다	자이다	재우다	眠

(59) “놀래다”と“놀늑이다”の分布

15世紀	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	20世紀	意味
놀래다		놀래다 롤래다	놀래다 놀늑이다	놀릭다 놀늑이다	놀래다	驚

(60) “알외다”と“알외이다”の分布

15世紀	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	20世紀	意味
알외다	알외다 알위다	알외다 알위다 알외다	알외다 알외이다	알외다 알니다	(아외다) 알리다	知

(58)～(60)からは, 多重ヴォイス接辞の例が17, 18世紀になって確認される. すなわち, 短母音化は17, 18世紀になって起こったことになる. しかし, 短母音化といった音韻変化は同時期に一律に生じたと考えるのが自然であるから<sup>14</sup>, 多重ヴォイス接辞が生じた原因を短母音化に求めるのは問題であるといえる.

<sup>14</sup> 李基文 (1988: 211-212) は「ㅈ」と「ㄱ」が短母音化した時期を18世紀末頃と推定している.

### 3.3. 過剰翻訳

유경중 (1995) に対する本稿の代案は、多重ヴォイス接辞が生じた理由が、使役や受身といった文法概念を意識したためであったと考えるものである。この代案の妥当性は、以下の二例によって支持される。まず、(61)は『蒙老』に見られる“흔들리다”の例であるが、“흔들리다”は自動詞なので、この文脈では、他動詞の“흔들다”が正しいと考えられる。

- (61) 흔 사슬 통에 다마 檢擧흔는 선빅로 사슬 통 흔들려 그 중에서 하나흔  
 싸혀 싸힌 사람으로 글 외이이고, (一つのくじの筒に入れて監督する先  
 輩に筒を振らせて, その中から一本を選んで選ばれた人に文を読ませて)  
 [蒙老:一:5a4-5b2]

以下の(62)は、(61)に該当する『蒙老』以外の老乞大の箇所であるが、全て“흔드러”になっている。このことは(61)が不自然な例であることを支持するものである。

- (62) a. 흔 사슬통에 다마 덕실 선빅 흔야 사슬통 가져다가 흔드러 그 둥에  
 하나 싸혀 싸히니 닐고 흔야 문득 그 사람 흔야 글 외오요디,  
 [翻老:上:4a5-4a9]
- b. 흔 사슬통에 담아 덕일 선빅 흔여 사슬통 가져다가 흔드러 그 둥  
 에 하나흔 싸혀 싸히니 닐고 흔야 문득 그 사람 흔여 글 외오디,  
 [老諺:上:3b9-4a3]
- c. 흔 사슬통에 담아 當直 선빅 흔여 사슬통 가져다가 흔드러 그 둥  
 에 하나흔 싸혀 싸히니 닐고 흔야 문득 그 사람 흔여 글 외오디,  
 [平老:上:3b9-4a3]

- d. 흔 사슬통에 담아 當直 學生으로 혀여 사슬통 가져다가 흔드리 그  
중에 싸히니 넉고 혀여 곳 그 사름으로 혀여 글 외오되,  
[老新:上:4b-5b]
- e. 흔 사슬통에 담아 當直 學生으로 혀여 사슬통 가져다가 흔드리 그  
중에 혀나<sup>하</sup>를 싸혀 곳 그 사름으로 혀여 글 외오되,  
[重老:上:3b9-4a3]
- f. 흔 사슬통에 담고 檢擧<sup>흔</sup>는 선빅 사슬통 가져와 흔드리 그 中에서  
혀나<sup>하</sup>를 싸히느니. 싸지니 아피라도 즉시 외오게 혀느니.  
[淸老:一:5a2-5a5]

次に, (63)は『蒙老』に見られる“담기다”の例であるが, “담기다”は自動詞なので, ここでは他動詞の“담다”が正しいと考えられる.

- (63) 이 밥에서 흔 사발 담겨 저 벌의게 주자. (この飯から一杯ついで, あの連れにあげよう) [蒙老:三:6a7-6b1]

以下の(64)は, (63)に該当する『蒙老』以外の老乞大の箇所であるが, 全て“다마(담아)”になっている. このことは(63)が不自然な例であることを支持するものである.

- (64) a. 이 밥에서 흔 사발만 다마 내여 더 버들 주자.  
[翻老:上:42a9-42b1]
- b. 이 밥에서 흔 사발만 다마 내어 더 버들 주자.  
[老諺:上:38a6-38a7]
- c. 이 밥에서 흔 사발 밥 다마 내여 더 벗을 주자.  
[平老:上:38a6-38a7]

- d. 이피서 혼 사발 밥을 담아 내여 가져다가 저 벗을 주어 먹게 흐  
자. [老新:上:53b]
- e. 곳 혼 사발 밥을 담아 내여다가 가져다가 저 벗을 주어 먹게 흐  
자. [重老:上:38b9-39a1]
- f. 이 밥에서 혼 사발 다마 내여 저 벗의게 갖다가 주자.  
[清老:三:9b3-9b4]

上記の(61), (63)の例は, モンゴル語からの過剰翻訳によって生じたものと考えられる. 以下の(65), (66)は, それぞれ(61), (63)に該当するモンゴル語であるが, “kündelgejü”, “edeüljü” のように, 共に, 使役形になっている. つまり, 蒙学の訳官は, (61), (63)の “흔들리다” や “담기다” を使役の意味で用いているのである. 但し, 18世紀の “흔들리다” や “담기다” に使役の意味があったかどうかは明らかでない<sup>15</sup>.

- (65) nige sibay-a yin qonggiy-a du ayulju jakiruyçi baysi yi sibay-a yin qonggiy-a kündelgejü, tegünü dumda ece nigen -i suyulju suyulsan kümün -i bicig cejilegülümü.
- (66) ene buda ece nige ayay-a edeüljü tere nödür tü öggüye.

なお, 以下の(67), (68)は, それぞれ自動詞が現れる文脈で “담기다” が正しく用いられている例, 他動詞が現れる文脈で “담다” が正しく用いられている例である. (67), (68)は, (63)の “담기다” が不自然なものであったことを支持するといえる.

<sup>15</sup> 김형배 (1997:293) は使役の意味で用いられる “흔들리다” の例が18世紀に現れることを指摘しているが, 引用されている例は『蒙老』に見られるこの一例だけである. 使役の意味で用いられる “흔들리다” は他の文献には見られないようである.

- (67) 네 드릭를 드리 물 우희 띄워 뒹쳐 것구로쳐 물을 썬쳐들게 흐면 물이 절로 달기리랴. (お前さん, 桶を入れて, 水の上に入れ, ひっくり返し, 水を貫くようにすれば水が勝手にたまるだろう) [蒙老:二:22b1-22b4]
- (68) 아희들야. 네 흐 사발 밥과 적이 국 달아 가져와서 손틀 좃차 가져 저 벌의게 주어 먹어든 쏘 그르슬 거두워 가져오라. (子供らよ, お前は一杯の飯と少しの汁をついで持ってきて, 客についていってあの連れにあげて, 食べ終わったらまた器を片付けて持ってきなさい)  
[蒙老:三:7a6-7b3]

以上, 3章では, 蒙学書に確認される不自然な朝鮮語が, 朝鮮語の文法史研究に貢献する例として, 多重ヴォイス接辞について考察した. 蒙学書を研究対象に, モンゴル語と朝鮮語の対照研究を通じて考察した結果, 18世紀に多く出現する朝鮮語の多重ヴォイス接辞は, 使役や受身といった文法概念を意識した結果生じたと考えられる<sup>16</sup>.

#### 4. 結語

以上, 本稿では, 『蒙老』と『捷蒙』に, いくつか不自然な文法形式が見られることを指摘した. このような文法形式は, モンゴル語を直訳した結果, 生じたもので, 蒙学書の朝鮮語を使用する際に注意を要する例である. 一方で, これらの不自然な例は, 朝鮮語文法の変遷を明らかにする上で重要な証拠ともなる. その一例として, 多重ヴォイス接辞について言及した. 本稿では, 多重ヴォイス接辞を言及するにとどまったが, このように, 蒙学書を研究対象にす

---

<sup>16</sup> 従来, ヴォイス接辞の起源については, 使役の“-이-, -히-, -리-, -키-”から受身が発達したとする説 (이항천 1990, 權在一 1991, 1993) や元々“-이-, -히-, -리-, -키-”は使役形ではなく他動化させる要素に過ぎないとする説 (송창선 1992) などがあるが, 本稿の主張が正しいとすれば, 朝鮮語には受身や使役といった概念はもともとなかったという結論に達する.

る意義は,このような文法の対照研究にあるといえる. 蒙学書の朝鮮語の研究は,朝鮮語の文法史の研究に貢献すると考えられるが,より詳細な研究は,今後の課題である.

## 参考文献

- 姜信沆 (2000) 《韓國의 譯學》, 서울대학교출판부.
- 郭忠求 (1980) 十八世紀 國語의 音韻論的 研究, 서울대학교 석사학위논문.
- 權在一 (1991) 문법변화의 두 방향, 《국어의 이해와 인식》, 한국문화사.
- 權在一 (1993) 한국어 피동법의 역사적 변화, 《언어학》15: 25-41.
- 權在一 (1998) 《한국어 문법사》, 박이정.
- 김형배 (1997) 《국어의 사동사 연구》, 박이정.
- 류성기 (1984) 18세기 국어의 피동문과 사동문에 대한 연구, 한국정신문화연구원 부속대학원 석사학위논문.
- 류성기 (1998) 《한국어 사동사 연구》, 홍문각.
- 송창선 (1992) 15세기 국어의 사동·피동표현 양상, 《語文學》53: 209-235.
- 송창선 (1996) 근대국어의 사동·피동표현 양상 연구, 《문학과 언어》17:5-42.
- 송창선 (1998) 《국어 사동법 연구》, 홍문각.
- 石朱娟 (2003) 《노길대와 박통사의 언어》, 태학사.
- 宋基中 (1993) 蒙學書, 《國語史 資料와 國語學의 研究 (安秉禧先生回甲紀念論叢)》, 서울大學校 大學院 國語研究會 編: 271-296, 文學과 知性社.
- 우인혜 (1997) 《우리말 피동 연구》, 한국문화사.
- 유경중 (1994) 근대·현대국어 중첩 피동표현에 대한 연구, 《韓國學論集》25:53-85, 漢陽大學校 韓國學研究所.
- 유경중 (1995) 근대국어 피동과 사동 표현의 연구, 한양대학교 박사학위논문.
- 李琰鎬 (2004) 《근대국어문법》, 태학사.
- 李基文 (1998) 《新訂版 國語史概說》, 태학사.
- 李相億 (1970) 國語의 使動·被動構文 研究, 서울대학교 석사학위논문.
- 이향천 (1990) 피동의 의미와 기원, 서울대학교 박사학위논문.
- 崔起鎬 (1994) 《몽고노길대 연구》, 상명여자대학교 출판부.

- 韓在永 (1984) 中世國語 被動構文의 特性에 대한 研究, 서울대학교 석사학위논문.
- 洪允杓 (1994) 《근대국어연구(Ⅰ)》, 太學社.
- 小倉進平·河野六郎(補注) (1964) 『増訂補注 朝鮮語学史』, 刀江書院.
- 菅野裕臣 (1963) 「『捷解蒙語』のモンゴル語について」『朝鮮學報』27: 65-93.
- 菅野裕臣 (2000) 「『捷解蒙語』について」『朝鮮學報』175: (1)-(83).
- Song, Ki Joong (2001) *The Study of Foreign Languages in the Chosŏn Dynasty (1392-1910)*, Seoul: Jimoondang Publishing Company